

市民研 news 11



People's Institute of Environment

市民環境研究所

「環境」の名に恥じない活動を

石田紀郎（市民環境研究所代表理事）

異常気象の春から夏へ

満開の桜の花に雪が降った。20年ほど前にも同じような現象を見ており、桜花が寒さのおかげで長持ちするなど喜んでいたので3月末である。まさかその後こんな異常気象が長々と続くとは思っていなかった。4月の寒さは5月も続き、春に植え付けた野菜の苗は、芽を出したものの子葉から本葉への展開は遅々として進まず、キュウリは本葉2枚目の段階のままで5月末まで止まっていた。桜前線が津軽海峡を渡れず、北海道では2週間以上遅れて咲いたとのこと。田植えしたイネの苗は2週間以上も苗の状態のままであった。

かくして、気象予報士協会の代表が「1980年の寒い夏の気象状況に酷似してきた」と夏を気遣い出した。地球規模的異常気象が発生しており、CO₂濃度の高まりと

地球温暖化の現れの一つかも知れないが、世界的食糧生産低下にならないでほしいものである。

環境問題の本質が見えにくい

こんな自然現象を肌で感じる毎日が続くと、「温暖化」や「地球環境」が、人類が直面している環境問題のすべてであるかのような気がしてくる人も多だろう。21世紀に入ってから、大学の新生に「関心のある環境問題は何ですか」と質問すれば、9割以上が「地球環境問題」とか「温暖化」と答える。先日もある大学の先生にこの話をしたら、彼のゼミでも同様で、ゴミ問題を考えるグループを作るのに苦労したと言っていた。

温暖化やCO₂削減が現代のキーワードであることに異論を唱えている訳ではない。身近なゴミや水の問題が解決されていないのにもかかわらず、そのような問題が重

要だと思っていない節がある。まして、水俣病やアスベスト問題が環境問題として若者に認識されていないようである。

当市民環境研究所には農業から農業を考えている「農業ゼミ」のメンバーがいるが、農業のことなどは昔の課題だと思っている新生の勧誘に苦労しているようである。地球環境問題に関心を示さないよりは関心を持っていた方がよいが、「エコな」商品を買えば、使えばそれで責任を果たしているかのような錯覚を与えるテレビ番組やコマーシャルのレベルに留められているようである。

縮小社会に向かうのか

こんな傾向が年々強くなり、環境問題が発生している現地に入り込み、事態を自分の目で確かめ、問題の本質に迫る調査研究をやるような研究者もまた、(P3へ続く)

沖縄シリーズ1 環境塾 第14回

沖縄の農とくらしの今

4月17日(土) / 参加者: 15名

夏目ちえさん(有限会社真南風代表)

構成: 水口保



真南風の創業者は魚住けい(故人)という非常に志の高い女性で、石垣島との関係は、1985年の空港建設反対闘争に関わったことに始まりました。しかし、大田元知事が白保沖埋立を白紙撤回したことをきっかけに運動からは距離をおくようになります。その過程で、塩蔵もずくを生協や産直団体に販売することで活動資金を得ていたのですが、白保のうみんちゅが経済的に自立することの大切さに気づき、それを支援する活動を継続していました。そして1995年に農産物を中心に加工品・工芸品を取扱う会社として真南風を魚住とともに創業したのです。

もずくの販売を通じて本土の流通とのパイプはありましたので、人を介して農産物の生産者を紹介してもらい、まずはパイナップルからスタートしました。

現在扱っている農産物としてはやはりパイナップルが一番多く、2~5月はカボチャやキュウリ・トマト・インゲンなどの夏野菜、5~7月はマンゴー・ドラゴンフルーツなどのトロピカルフルーツを出荷しています。

*

いろいろな問題を抱えつつやって来た真南風ですが、2004年に魚住が急逝し、大きな転機を迎えました。

しかし生産者から「なにがなんでも辞めるな」と毎日電話で励まされ、農協との取引をやめた生産者もあり、そういう声に押されて、私が代表を務めるという形で事業を引き継いでいます。

「地産地消」「身土不二」という観点から、沖縄の野菜を

内地に空輸することの是非を問われることがあります。突き詰めて考えると、よくないことはわかっています。それでもこの仕事を続けているのは日本人の食生活が大きく変わってきたことが背景にあります。

たとえばキュウリひとつ取ってみても、スーパーなどで年中いつでも買えます。この現実はどうすることもできません。それならば、せめて素性の知れた国産物を食べたいという層に、安全な農産物をお届けするのが真南風の存在意義のひとつだと思っています。

創業当初は無農薬をめざしましたが、沖縄では現実問題としてむづかしい。一年中草が生えており、特に冬に雨が多いため、虫が年中繁殖しています。それでも「薬は一切使わん」と言い張った「おじい」もいましたが、あつと言うまに作物が全滅し、「もうないさあ」で終わり、ということもありました。一番困るのは生産者なので、私たちもいっしょになって勉強会を立ち上げ、中学生レベルの化学の基礎から学び直しています。最低限の農薬は必要というスタンスですので、一部の農薬は使います。しかし、勉強会を通じて土壌分析を行うようになってから、農薬の散布量が減ってきているという事

実もあり、手応えを感じています。

有機栽培についても、パイナップルはむづかしいのが現実です。果物は味が一番、有機ではパンチのある味にはならず、輸入物には勝てません。理想としての有機栽培はもちろん忘れておらず、厳しい現実のなかで、少しでも理想に近づける努力は、これからもつづけていきます。

*

沖縄が経験してきた歴史、グローバル化という現実を踏まえつつ、沖縄の人たちがここで生まれ育ち、これからも生活の場として住み続けていきたいという気持ちを、外から来た私たちはどうやって応援するか。困難なことはたくさんあるけれど、それらと折り合いをつけながらやっていくのがこの仕事の、もうひとつの意味だと思っています。

最後に、創業時に魚住が書いた「真南風設立のごあいさつ」の一部を引用しておきます。今も、真南風の精神的な支柱です。

「真南風」が島からいただくものは、熱帯果樹、在来の果樹・野菜、海・山の加工品、島酒(あわもり)、工芸品などですが、これらは島々からの責い、「寄い物(ゆいむん)」でございます。

願わくば、食べごしらえの素材を通して、沖縄の食の文化・風土・歴史のみならず、「島宇宙」と呼ばれる、島それ自身の内的生命体に触れ得ることができるような仕事になりますように。

有限会社 真南風(まはえ)

<http://www.mahae-okinawa.com/>

沖縄から何を見るのか

4月24日(土) / 参加者：9名

大湾宗則さん(京都沖縄県人会会長)

まとめ：石田紀郎

「今、沖縄が注目を集めています。普天間基地と新基地を巡って、本土に住むウチナンチュや沖縄大好きヤマトンチュが無関心ではおれません。この機を逃してはならない……、ふるさと沖縄は、全島をあげて普天間基地は県外へ国外へと呼びかけている。この機を逃してはならないとの思いを持つのは私だけではないと確信しています」と冒頭に書かれたレジュメをかざして大湾さんが語りだしたのは4月の24日のことだった。

そして、この記録を書いている6月の初旬に、「少なくとも県外へ、国外へ」と公言して、真剣に普天間と向き合おうとした鳩山由紀夫総理大臣は、あえなく挫折して逃亡。次の菅直人総理が、鳩山時代に宣言した日米共同声明をどのように具現化するのが注目されるが、「この機を逃しては」と立ち上がった沖縄の人々の落胆と怒りを日本中の問題としうるかどうかを、ウチナンチュで京都在住の大湾さんが問題提起したのがこの環境塾だったと思う。

*

沖縄が戦後64年の間、在日米軍の基地の75%も押しつけられてきたことの不当性と困難を誰も否定するこ

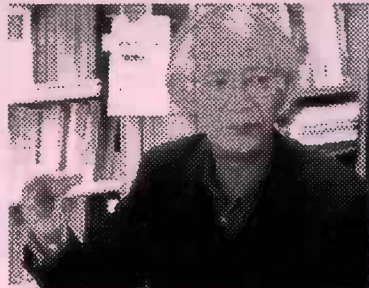
とはできない。肥沃で平坦な土地は基地に取られ、経済的自立の条件を奪われてきた。

その上に、強盗殺人レイプ暴行の発生は日常的となり、1995年の少女暴行事件、沖縄国際大学での米軍ヘリ墜落事件などを経て、沖縄県議会での基地反対派が過半数を占め、先の総選挙では鳩山民主党の県外・国外移設と辺野古基地建設反対の公約で、全選挙区で勝利しました。沖縄県議会も全会一致で普天間基地の国外・県外移設を求める意見書を採択するなど、全島挙げての運動の高揚の中にあつた。

大湾さんは講演の中で、本土に住む我々が思い込まされてしまっている「沖縄は貧しいところで、基地がなければ生きていけない」との思い込みが全くの間違ひであると指摘された。すなわち、沖縄復帰の1970年代は基地関連による沖縄の収入は沖縄県民総所得の15%であったが、2006年にはわずかに5%となり、観光収入の10%をも下回るものに過ぎないという。

仮にもっと高い割合で基地が沖縄の経済に占めていたとしても、辺野古の海を基地から守る戦いの先頭に

■沖縄シリーズ2 環境塾 第14回



立っている老人たちの、「この海は、あの沖縄戦で食うものがなかったときに子供を育てた命をつなぐ宝物、辺野古の海を埋めるならわし等を殺してからにしろ」と、ただひたすら辺野古の海浜に連日座り込んでいるおじいとおばあを乗り越えるものはないだろう。

*

この間、鳩山総理の言動は右往左往していたのは事実だが、政権交代は非核三原則に反してアメリカの核兵器搭載艦船の寄港通過を認めた日米の密約の存在を明らかにし、核抑止力や沖縄駐留海兵隊の欺瞞性を白日の下にさらした。「戦後」を忘れてちである本土の人々が、この間の「辺野古」から何を学びいかに行動するかを、沖縄の人々から注視されていることを学べた環境塾であった。

(P1から) 少なくなっている。「エコ」とか「環境」とかを冠すれば良い人のように思われる風潮が蔓延し、誰かが収集したデータをパソコンの中で加工して、シミュレーションすれば環境問題研究になると考えている風潮の中で育っただけなのかもしれない。

「環境」とか、「エコ」とかの冠

を外し、人間社会が持続するためには「辛抱」が「常態」になり、「心地よい」と思える社会、生き方を探ることが緊急に求められているのだろう。

当研究所の理事である松久さんが「縮小社会研究会」を立ち上げられて活動を開始されており、詳細は割愛するが、きっちりと「縮

小社会」を目標に定められていることはさすがである。そんな社会は、地球規模とかCO₂だけを議論しても実現できないだろう。当市民環境研究所も環境という文字を含んでいても恥ずかしくない活動を展開せねばと自戒している。

国際交流を通じて環境問題を学ぶ 国際青年NGO SAGE



ミーティング風景

国際青年環境NGO SAGE (Solid Action on Globalization and Environment, セージ) は水問題について取り組む学生団体です。立命館大学・同志社大学・京都大学などの学生10人ほどで活動しています。

SAGEは、1999年のWTOシアトル会議をきっかけに発足しました。環境とグローバリゼーションというキーワードを軸に、学び、広く社会に啓発することを目的としてきました。2008年からは、テーマを「水」に絞って活動しています。これまでに、アラル海へのスタディーツアーと写真展、第4回ユース世界水フォーラムへの参加、水に関わるユース団体のネットワーク「Youth Water Bridge Japan」の構築などに携わってきました。現在は、水ビジネスについて、実際に現地に行ったりしながら勉強をしています。

アラル海へのスタディーツアーは、2008年の夏に行ないました。アラル海は、中央アジアにある湖です。昔は世界第4位の大きさでしたが、旧ソ連時代の農業政策のせいで今は5分の1以下にまで涸れてしまいました。市民環境研究所の石田先生にご助力いただき、カザフスタンにあるかつての港町アラリスクと、市民環境研究所が植林をしているカラテレン村周辺を訪れることができました。

た。かつての湖の底が今では見渡す限りの砂漠になっているその光景に、世界の水問題の深刻さを垣間みた気がしました。その現状を伝えるべく、SAGEは大学などでアラル海の写真展を行いました。

2009年3月には、トルコで行なわれたユース世界水フォーラムに参加しました。フォーラムには100人ほどの若者が参加し、日本からはSAGEや、北海道、東京の水の団体から13人が参加しました。5日間の議論の末に、水に関する宣言文をつくりました。慣れない英語での議論や、煩雑な応募プロセスに苦労しましたが、世界で活躍するユースと交流することは非常に大きな刺激になりました。帰国後は、フォーラムの成果を広めるために報告会を行ったり、2012年にフランスである次回フォーラムに向けての体制作りをしています。その動きの一つが、「Youth Water Bridge Japan」(YWB)です。

YWBは、世界ユース水フォーラムに参加したメンバーが中心となって立ち上げた、水関係の活動をするユースのネットワークです。フォーラムの反省として、フォーラムが終わると関係が断ち切れてしまって経験が次回につながっていかないということが挙げられます。YWBを中心にして、フォーラムでできた繋がりを持続し、さらに他の水関係のユースにも広げていくことが挙げられます。

去年の夏には、SAGEと北海道の学生団体WACCAで交流合宿を行いました。合宿にはフォーラムに参加していなかったメンバーも来て、交流の輪を広げることができました。今年はさらに多くのユースを巻き込んでいくことを予定しています。

2009年度は、漂着ゴミについての勉強会やフィールドワークを行いました。海を越えて、日本に流れ着いたり、逆に日本から世界に流れたり、環境を汚してしまう漂着ゴミ。実際にゴミ拾いの団体の活動に参加し、問題の難しさを感じました。

今年度は、水ビジネスに関して活動をしています。水は生きるために不可欠なものですが、発展途上国では、人々が安全な水を安い値段で手に入れることをできずにいます。こうした問題を解決する方法の一つが、水道や浄水器などの、水に関わるビジネスです。中でも、水道事業は、注目が集まっていると同時に議論的にもなっています。世界では、水道事業の民営化が進んでいますが、民営にすることで水道サービスが改善された例もあれば、逆にサービスが悪化して貧しい人の手に水が届かなくなったこともあります。

SAGEは、民営化の是非を考えながら、どうすれば世界の水事情を改善できるかについて勉強していく予定です。今後は、海外でのフィールドワークも視野に入れつつ、民営化されている水ビジネスの事例、公営の事例などを調べます。そして、最終的には、水ビジネスについて様々な形で社会に啓発を行なうこと、提言を行なうこと、ビジネスプランを立案しビジネスコンテストに応募することの三つを目標としています。

まだ方向性は手探りながらも、今年の春から入った新しいメンバーを加えて活動をしています。SAGEはこれからも水に関する問題に目を向け、アクションを起こしていきます。

文責：湯谷啓明 (元SAGE代表・東京大学大学院修士1年)

4

テーマは「自治」

生活クラブ生活協同組合・東京

日本全国には約500の生協がある。その中で私の勤務する生活クラブ生活協同組合（以下、生活クラブ）は、42年前に東京で設立され、現在は1都1道2府15県に29単協、約31万人の組合員で構成される生協である。全国合わせても京都生協よりも規模は小さく…それを逆手にとって、生協業界の異端（?!）と一部でささやかれながらCO-OP商品やNB商品は扱わず、品目の9割以上が独自規格、たすけあいをベースにした地域社会づくりに力を入れている点が特徴といえる。

筆者は、大学卒業後に生活クラブに就職、現在4年目の職員である。理事会等を担当する本部事務局を経て3年目から配送センター勤務となり、1.5tトラックを乗り回して配達しながら、地域の組合員活動をサポートする役割を担っている。

本原稿では、私がこの3年でまに関わった生活クラブ生協の市民運動としての側面から、生協について考えるところの断片を少しでもお伝えさせていただければと思う。

テーマは「自治」

いきなりだが、誤解を恐れずに言えば、生活クラブの主題は『安心・安全』『無農薬・減農薬』『無添加』でもなければ、『環境』でもない。『自治』=自分たちの生活領域を自らコントロールできるところに取り戻すこと、そしてそれに不可欠な徹底した『情報公開』、それがすべての活動の基本となる主題である。先に主題ではないと述べた事柄は、その結果として組合員が議論し悩みながら選択し実現してきたもの、また今なお追求しているものである。だから、対象とする活動領域は「食」にとど

まらず、地域福祉、政治など、生活に不可欠なさまざまな領域へと広がっている。

たとえば遺伝子組み換え作物の問題、原発の問題、政治とカネの問題など…それらに共通するのは、市民のコントロールを超えた見えないところで、見知らぬ少数の人が、おおぜいの犠牲の上でうまい汁を吸おうとしていること。私は何よりもそのことが許せないと感じる。それらに対抗する力として、市民による「自治」を追求する方法を選んだ、その方向性に共感したからというのが、今私がここにいる一番の理由かもしれないと思っている。

「自治」を実現するために、一人ひとりの力はあまりに小さいから、力を集める。集めるための器として生協という形を選んだ。生活クラブはそういう生協である。

集めるのは一人ひとりの「思い」

生活クラブには組合員を総称する意味の「おおぜいの私」という言葉がある。これは、無自覚に個人が集まった「私たち」という主体のない集団ではなく、思いを持った主体的な個人の集まりであるということを用意している。

あるとき、自分のちょっとした提案が、人から人へ伝わり、自分の意図を越えて大きなうねりとなって活動が広がっていくことを目の当たりにしたことがあった。さまざまな思いや経験を持った人の集団が持つ力ってなんと面白いのだろう、と実感した瞬間であった。さらに、思いを持って人が集まるところには、達成感、挫折感、共感……いいことも悪



地域で生活クラブをアピールするキャラバンカー

いことも含め、一人で味わうのとは全く別な「強く心動かされる瞬間」が生まれる。ときに、足し算ではなく掛け算の力が生まれる。

だから運動はすべて、人が集まることからはじまると私は確信している。「主婦」をあてにしてきた従来の生協運動は今の時代にはそぐわないという批判はよく聞く。だからこそ、いかに今の時代に人が集まるしかけを作っていくか？ 生協はその舞台として機能しうるのか？ 私はここで挑戦していきたいと考えている。

スーパーマーケット業界が宅配に力を入れているという。またある生協は、スーパーマーケットと熾烈な値下げ競争をしているという。だけど……ちょっと待って！ ○○スーパーを「やっている」という日本語は、何か変だ。でも、○○生協を「やっている」という日本語は今まだ皆の中で生きている。その違いの部分が、生協に残された可能性であり、課されている使命だと思っている。生活クラブに限らず、市民運動の現場として今尚頑張っている生協、また生協に限らず様々なテーマで問題に立ち向かっている人たちと連携を深めながらこれからの運動をつくってきたい。

（文責：生活クラブ生活協同組合・東京大田センター職員 脇田千鶴）

里の前
だより

市民研を 元気にしてください

石田紀郎

2003年の春にこの事務所を開設し、その後、皆様のお力添えでNPO法人格を取得して7年が経過しました。京都は左京区の一等地に位置しながら何ほどのことができたかと反省しております。

最大の言い訳は、京大を辞めた後はこの事務所を拠点にして再度の市民運動を考えていましたが、予想と希望に反して亀岡にある京都学園大学バイオ環境学部の創設に携わり、開設後は専任教員として4年間を務め、この3月で定年退職するまで、事務所にいる時間は夕刻からのみとなってしまいました。

やっと亀岡勤務から解放され、これで事務所に毎日勤務と思っていたのですが、学園大に在任中に始まった環境教育プロジェクトの本部校である人間環境大学(愛知県岡崎市)に特任教授として週2日勤務することになり、今度は新幹線にて水、木曜日の1泊2日通勤と相成りました。この仕事は2年間で終了しますが、その間は月、火、金、土の午後から夜は市民研に居ることになっています。体力・気力・能力などは低下の一途を辿っており、事務所に居ても何ほどのことができるかと不安ではあります。

しかし何もせずに隠居していただけるほど世の中は平和ではなく、活躍する人たちの後ろを付いて行くだけでもいいかもしれませんが、もう少しがんばるつもりです。会員の皆さんや仲間の皆さんがこの事務所を大いに利用していただきたいと思っておりますので、ぜひともご来所いただき、市民環境研究所を元気にしてください。お待ちしております。

BOOK REVIEW

「マラケシュの腐化石」
スティーヴン・ジェイ・グールド 著
早川書房 発行

この本は、米国の古生物学者、故スティーヴン・ジェイ・グールドのエッセイ集である。本は上下巻で23章から成っている。タイトルの通り、腐化石の話から始まるが、個々の章のテーマは独立して化石とは全く関係のない話もある。しかし全体を読むとそのテーマは一貫していて大変おもしろい。

18世紀、ベルツブルク大学のペリンガー博士が、化石に関する本を出版した。その中で彼は、自身が発掘した三日月や太陽の化石を紹介する。しかし、それは彼のライバルが彼を

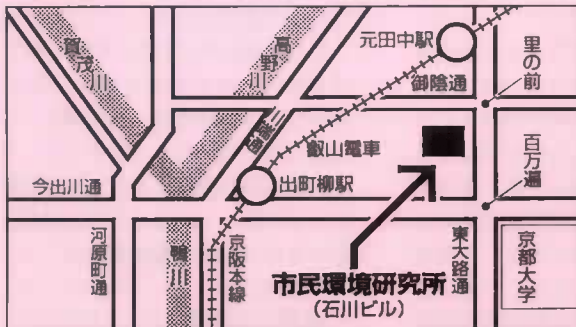
陥れるために発掘場所に埋めた偽物、つまり仕組まれた罠だった。現在ならば、月や太陽の化石が存在しないのは明白である。しかし、18世紀では地球は6000年前の天地創造で作られ、植物のタネが地面に落ちれば鳥になり、腐った肉に熱が加われば自然にウジが発生するといったことが信じられていたため、地面に何らかの石化力が働き月や太陽が石の中で発生するという説はむしろ自然であった。これが示すように自然科学という学問は客観的ではなく、あくまでもその時代の価値観が反映されたものであるということを思い知らされる一冊である。

格調高い筆致と聖書など古典からの引用が豊富に使われていて、筆者の教養の高さがうかがえる。私は学部の一回生のときに図書館で借りて



一気に読んだが、おもしろかったので、四回生のときに書店で買ってもう一度読んだ。それくらいの価値はあると思う。

京都大学農学研究科地域環境科学専攻
修士二回 富山博喜



【年会費 (1口)】

- 正会員 (1口以上)
個人：5,000円、学生：2,500円
団体：20,000円
- 賛助会員 (3口以上)
個人：1,000円、団体：10,000円

NPO法人 市民環境研究所
〒606-8227 京都市左京区田中里ノ前21 石川ビル305
Tel & Fax 075-711-4832
[E-mail] pie@zpost.plala.or.jp
<http://www.13.plala.or.jp/npo-pie/index.html>